

儂さを運ぶ植木鉢：映画『レオン』と祭式「アドニス園」比較分析

著者	猪俣 佳瑞美
出版者	法政大学大学院
雑誌名	大学院紀要 = Bulletin of graduate studies
巻	70
ページ	29-41
発行年	2013-03
URL	http://hdl.handle.net/10114/7843

儂さを運ぶ植木鉢

—映画『レオン』と祭式「アドニス園」比較分析—

人文科学研究科 英文学専攻

国際日本学インスティテュート

博士後期課程1年 猪俣 佳瑞美

0. はじめに

植木鉢とは、植物の種子を発芽させる場所であり、植物がその生を全うする場所でもある。植木鉢に植栽を施した状態は鉢植え¹と呼ばれるが、その歴史は古く、紀元前3世紀、エジプト人は土器に植物を入れ中庭に飾っていた²、と言われている。植木鉢や鉢植えは主に造園学、園芸学、植物学の分野でなされる研究において取り上げられているが、植木鉢や鉢植えそのものが研究の中心に据えられることは滅多になく、その存在が軽視または見過ごされてきた、と言わざるを得ない³。実際、植木鉢や鉢植えを表象的に取り上げ、人文科学の視座から取り組んだ学際的研究に至っては、ほとんどなされていないのが現状である。

だからこそ筆者は、なぜ人は鉢植えを身近に置くのか、というシンプルな問いを立て研究することに意義を見出す。人と鉢植えは長い歴史の中で深い関係を結んできた。植木鉢は人と植物を結ぶコミュニケーションツールとして機能し、自然界の植物を人間界へ引き寄せる上で重要な役割を果たしてきた。そして植物は植木鉢という持ち運び可能な容器に植栽されることで地面に生えている時とは異なる存在意義を持つようになり、鉢植えを中心とした娯楽や文化が世界各地で形成された⁴。鉢植えはクリエイターの想像力も刺激し、鉢植えが象徴として扱われている文学、映像、楽曲、芸術作品は枚挙に暇ない。

本稿では、そのような映像作品の中でも代表的といえる、鉢植えが重要な役割を担っている映画『レオン（英題 Léon: The Professional）』（1994）⁵の分析を通じて、人と鉢植えの関係を考察したい。本作品は公開から18年経った現在でも根強い人気を保ち⁶、広く認知されていると考えられる。作品中、鉢植えは全編に渡って登場し、主要登場人物が直接的に関わり、ラストシーンにも映し出されるため、それらを分析することで、鉢植えと向き合うことで喚起される人の感情や想像力、そこから生まれる人と鉢植え植物のコミュニケーションスタイル、鉢植えが象徴として伝えるメッセージを浮き彫りにしてゆく。

映画『レオン』の鉢植えに注目した以下の分析で明らかになるのは、作品のテーマ「純愛」が持つ複層的含意である。殺し屋レオンと少女マチルダの純愛が美しい残像を視聴者に残すのは、そこに「生」と「死」を内包した「儂さ」があるためだ。この「生」と「死」の同居は、種を芽吹かせ育てる「生」の場という役割と、大地から隔離された植物が命を全うし枯れる「死」の場という役割を持つ植木鉢にも当てはまる。レオンとマ

1 本稿では、植木鉢とそこに植栽された植物の総称として「鉢植え」という語を用いる。ただし、主に鉢に植栽されている植物を示す際には「鉢植え植物」という語を使用する。

2 Horwood (2007, p.8)

3 セラミックスの研究を専門とする素木（1987, p.21）は、植木鉢の研究という「何をつまらないことを、といわれそう」と記し、植木鉢の粘土に関する研究がイギリスとドイツにはあるものの日本では行われていないことを指摘している。

4 白幡（1994）、川島（1999）、平野（2006）、丸島（1982）など。

5 本研究では、現在最も入手しやすいDVD『レオン（完全版）』を使用した。また本稿で使用した写真は、ベッソン（1996）から引用した。

6 米国 Amazon.com 情報オンラインベース IMDb（インターネットムービーデータベース）において上位 250 作品中 31 位に選ばれている。2012 年 11 月 28 日 <http://www.imdb.com/title/tt0110413/> より情報取得。

チルダの「儚い」関係は、「生」と「死」を運ぶ容器としての植木鉢が内包する二面性と重なり交わり合いながら、物語をダイナミックに動かしてゆく。

興味深いことに、ギリシャ神話に登場する美少年アドニスを讃える祭りアドニア祭で行われた「アドニスの園」と呼ばれる植木鉢を使用した祭式においても、この映画『レオン』における「生」と「死」を運ぶ容器としての植木鉢が内包する二面性が、同様に見て取れる。よって本稿では、フランス・アメリカ合作作品として製作された現代の人気映画『レオン』と、ギリシャ神話に原点を持つ古代祭式「アドニスの園」を「儚さを運ぶ植木鉢」という観点から分析、植木鉢が内包する「生」と「死」という二面性が、時間的にも地理的にも遠く隔たった二つの異なる文化において現れることを具体的に明らかにし、鉢植え文化に新たな光を当てる一助としたい。

1. 映画『レオン』における鉢植え

1.1 古典的なパラダイム

リュック・ベッソン監督による映画『レオン』は、米国ニューヨークで生きる孤独なイタリア系移民の殺し屋が、家族を殺された少女との共同生活を通して他者との精神的繋がりを育んでいく様を描くバイオレンスアクション作品である。ジアネッティは、映画における象徴（symbol）は誰の目にもはっきりと見えるもので、付加的な意味を暗示している⁷と述べているが、この作品の中で繰り返し画面に登場する鉢植えは、単なる置物ではなく、明らかにこの意味での象徴として機能している。

『レオン』の物語は、1910年頃から映画製作者を支配してきた物語構造の特徴である古典的なパラダイム⁸に忠実に作られている。具体的には以下のような典型的形式である。

- ・アクションを主導する主役と、それに抵抗する敵役とのあいだの対立が基本。
- ・暗に仄めかされた劇的な対立で始まる。
- ・この対立は、具体的な出来事へと繋がられてゆき、更なる緊張感が高められてゆく。
- ・対立による緊張感はクライマックスに達する。ここでは主役と敵役が公然と衝突する。ストーリーはある種の形式的な結末で終わる。悲劇では死。
- ・最終ショットでは哲学的な概観、これまでの題材の重要性に関する要旨が述べられる。

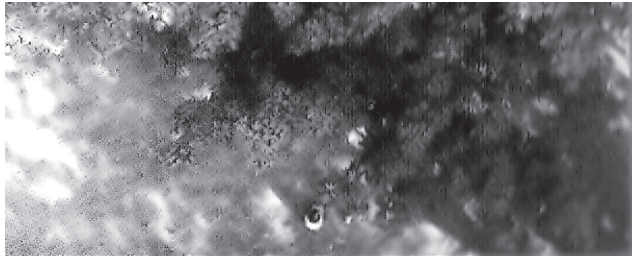
この古典的パラダイムを『レオン』に当てはめてみよう。主要登場人物は3人、殺し屋のレオン、麻薬取締局の捜査官であり麻薬密売組織の元締めでもあるスタンスフィールド、家族をスタンスフィールド達に殺されレオンに助けを求め復讐を企てる少女マチルダである。

まず、アクションを主導する敵役スタンスフィールドと、それに抵抗する主役レオンの対立が基本である。この対立はマチルダの家族がスタンスフィールド達によって殺されるという出来事により具体化されレオンがマチルダの面倒をみるという展開へと繋がってゆく。緊張感のはマチルダが殺された家族のリベンジを企てレオンもその計画に加担する過程で高まり、敵役スタンスフィールドとの対立が起きる。緊張感のはクライマックスで最高潮に達する。敵によって包囲されたレオンはマチルダを逃がし、敵役スタンスフィールドと衝突する。そして悲劇のストーリーは主役と敵役の死で終わる。

最終ショットに現れるのが、マチルダと植木鉢と植物である。マチルダは植物を植木鉢から取り出し地面に植え替える。するとカメラは上空からのアングルへと変わりマチルダと植物と空になって横になった植木鉢が映し出される。エンディングテーマが流れる中その姿はカメラの上昇と共に小さくなってゆき、ハドソン河越しにマンハッタンを望む景色で終わる。

⁷ ジアネッティ（2004, p.110）

⁸ ジアネッティ（2004, p.61）



鉢植えは、ストーリー展開を左右するほど大きな役割を担ってはいない。しかし最終ショットに現れることから、古典的なパラダイムに従って考えた場合、「哲学的な概観」や「これまでの題材の重要性に関する要旨」を伝える小道具として植木鉢と植物が映し出されている、と仮定することが出来る。では、この植木鉢と植物のショットによって表現される「哲学的な概観」、言い換えれば、植木鉢及び植物が、この映画において担う象徴的含意とは、何であろうか。

1.2 鉢植えが初登場する場面

鉢植えは物語の開始から約 15 分後、レオンの部屋が映し出されるシーンで初めて登場する。その場面に至るまでの流れを追いたい。

殺し屋として依頼された仕事を終えたレオンは、地下鉄に乗りアパートに帰る。アパートの 1 階にある雑貨店でミルクを購入してから階段を登り、廊下で座っているマチルダと短い会話を交わす。レオンが自室に入るとすぐに廊下では 3 人の男達の言い争いが始まる。レオンはその様子をドアの覗き穴から見ている。2 人の男達が去り、残った 1 人の男がマチルダを怒鳴りつける。レオンはそれがマチルダの父親であり彼女が父親から虐待を受けていることを知る。マチルダが部屋に入りドアを閉めたと同時に、レオンは覗き穴から廊下を見るのをやめ穴に円柱状の金属を差し込み塞ぐ。ここで視線は、レオンの視線からカメラの視線へと変わる。80 秒間に次の 13 シーンが流れる。登場人物はレオンのみ。セリフはない。

- 1) ドアの覗き穴を塞ぐ。
- 2) 開いている窓の外に置かれている鉢植えを受け皿ごと両手でつかみ室内のテーブルの上に置く。窓を閉め、カーテンを閉める。
- 3) 帽子をとり、サングラスをはずす。
- 4) コートを脱ぎ、丁寧に畳んでテーブルの上に置く。武器などが装備された皮ベストがあらわになる。
- 5) シャワーを浴びる。非常に疲れた表情。
- 6) 台所でグラスに入ったミルクを見つめる。ここから白い袖なしのタンクトップ姿。
- 7) 衣類にアイロンをかける。ゆっくりと、丁寧に。ある意味注意深く。
- 8) 鉢植えの植物の葉に霧吹きで水をスプレーする。そして布で葉を拭く。
ここまでタンクトップ姿。
- 9) 長袖の黒いシャツを着た姿で、ピストルをサイドテーブルに置く。
- 10) イスに腰掛ける。
- 11) サングラスをかける。
- 12) スタンドを消す。部屋が暗くなる。
- 13) 部屋全体が映し出される。鉢植えは部屋のテーブルの上に置かれている。

一言も発することなく淡々と流れるこのシーンから読み取れるイメージは、孤独な男のプライベートな場所における姿である。そしてこのプライベート空間でレオンは覗き穴を塞ぐとすぐに窓の方に向かい、外にある

鉢植えを部屋の中に入れた。そして窓を閉めガラス越しに外の安全を確認するとカーテンを閉めた。天候は穏やかで強風や嵐の到来から鉢植えの転倒を防ぐなどの理由で急を要したとは状況的にみても考えられない。また別の窓はこの後も開いたままなので、窓に向かった直接の目的が窓を閉めることでないことは明らかだ。また自分の帽子とサングラスを取る、上着を脱ぐといった、一般的に外出から帰った人がはじめに行うと考えられる実務的な行為よりも先に、鉢植えの置いてある場所に向かい室内に移動させた。これは、この鉢植えがレオンにとって大切な存在であることを示唆している。また、窓に近いテーブルの一角は、この鉢植えの定位置であることも、水やり用のスプレーなどが既にそこに置かれていることからわかる。物語には三つの部屋が登場するが、鉢植えは、この最初の部屋でのみ受け皿の上で育てられている。受け皿を使用することで得られる利点は、鉢植えを室内に入れた時、置いた場所を濡らす心配がないことである。逆に言えば、鉢植えが室外でのみ育てられているなら受け皿がなくても問題はないだろう。受け皿の使用はレオンが日常的に鉢植えを室内に移動させていることを暗示している。また、急な引っ越しを余儀なくされた2つめ、3つめの住居で受け皿は使用されていないことから、この部屋に彼が既に一定の期間居住していることも示唆される。

注目したいことは、室内に入れた鉢植えの世話が帰宅直後に行われないという点である。シャワーを浴び、ミルクを飲み、アイロンをかけ、しばらくプライベートな空間で時間を過ごすことで殺しという仕事からの緊張感を緩めているのだろうか。鉢植えの世話は、殺し屋という職業から離れリラックスしたプライベートな時間の最後に、位置付けられていることがわかる。その理由として植物の世話をしているレオンはタンクトップ姿だが、次のシーンでは黒い長袖のシャツ姿で、手にはピストルが握られていることを指摘したい。殺し屋のレオンには自身が襲われる可能性が常に付きまとう。ベッドで眠ることは危険すぎるため、彼はすぐに外出できる格好に着替え手の届く位置にピストルを置き、椅子に座って眠る。そしてスタンドの電気を消す前には、殺しの仕事に向かう時と同様にサングラスをかけるのだ。

マルヴィは、映画を見る行為が喜びにつながる仕組みについて「見る」「見られる」というどちらの行為にも視覚快楽嗜好があること、そして、観客がスクリーン上の登場人物に自分と似たものを認知し同一化することで登場人物に対する自己愛的な要素が生まれ、視覚快楽嗜好に拍車がかかる、と述べている⁹。この理論を、この場面に当てはめてみると、まず視聴者はスクリーンに映し出されたレオンの無防備な姿、言い換えれば、鉢植えの世話という地味な行為で1日の私的な時間を締めくくる40代男の孤独な姿を「見る」ことで、視聴者自身の私的で無防備な姿を「見られている」感覚になる。そして、レオンに対して自分と似たものを認知し同一化することで、視聴者はレオンに自己愛的なもの、すなわち、自分がレオンになったような気持ちになる、というのである。このように考えると、このシーンで鉢植えは、視聴者とレオンの距離を縮めることに一役かっている、とも言えるだろう。鉢植えの世話自体は、年齢、性別、国籍を問わず誰にとっても比較的身近な行為、と考えられるからだ。しかし、レオンの場合、その世話の方法が独特なのである。

1.3 触るという行為

レオンの鉢植えに対する特別な思い入れは、もはや水やりという作業を超えた独自性と特殊性によって浮き彫りになる。レオンが鉢植えに施す行為を順に見ていこう。彼はまず葉を一枚つかみ手のひらの上に乗せる。そしてもう一方の手で葉の表面に水をスプレーする。スプレー容器を置くと、次に布を取り、まるで人間がシャワーを浴びた後タオルで身体をふくように、水分を丁寧に拭き取る。植物に水分を与えることだけが目的なら根本に水を撒き葉に水をスプレーすれば十分である。わざわざ一枚一枚の葉に触れる必要は全くない。しかしレオンは鉢植えをテーブルの上に置き、その横に腰掛け、同じ視線の高さで眺め丁寧に触れる。

9 マルヴィ (1992, pp.42-44)

鉢植えはこの部屋の中で、レオン以外に生きている唯一の存在である。葉に触れる、という行為は、生きる他者との交流であり、同時にレオンが自らの命を確認する行為にもなり得る。他人に触れるという行為をレオンは殺しという仕事の最中には行っている。しかし、後ろからターゲットの首に手を回しナイフを突きつける等、触れてはいるものの、穏やかに向き合うことは決してないのである。映画『レオン』の原案脚本ともに手がけている監督リュック・ベッソンは、レオンのキャラクターを産み出してゆく過程について、次のように述べている¹⁰。

ひとりの冷酷な殺し屋像の向こうに、ひとりの繊細な人間がいることを、どうして示さないでいられよう？
(中略) 肉屋がこん棒で牛を叩きのめす様子を、その場で、目の前で見ていることが出来るだろうか？ 恐らく出来ないだろう。だが、肉屋は一年中毎日、百頭からを殺している。彼は叩いているとき、何を考えているのだろうか？ 彼の小さな庭のこと、次の休暇のこと、しなければならない買い物のこと、それとも彼にとってはいつまでも大きくならない子供たちのこと？ レオンは人を殺し、彼は自分の鉢植えのことを考えている。この岩のように非情な、冷徹な殺し屋にも心があるとしたら、一体彼に何を語らせることが出来るだろう。

この記述から、鉢植えはレオンの持つ「ひとりの繊細な人間」としての側面を描くために用意された小道具であることがわかる。レオンによる鉢植えの世話という、この行為の意味を更に探るには、異なる2つのレベルで、この行為を見てゆく必要があるだろう¹¹。ひとつは「逃避」行為として、レオンは鉢植えの世話に没頭することによって人殺しという現実から自らを解放している、と考えるレベルである。もうひとつは、最も身近な生きる他者との「コミュニケーション」行為として、彼にとって鉢植えの世話はペットとの戯れに似た喜びや癒しが得られる活動、と考えるレベルである。

レオンが鉢植え植物を擬人化¹²していることは、物語後半のシーンで判明する。マチルダから “You love your plant, don’t you?” (その植物が好きなのね) と問われると、鉢植え植物の葉を布で拭いたり指で触ったりしながら、 “It’s my best friend. Always happy. No Question. ” (親友さ、いつも幸せそうで、質問しない) と答えるのだ。また、 “And it’s like me, you see, no roots. ” (そして自分みたいで、根がない) というセリフからは、彼が自分自身を鉢植えと同化させていることもわかる。心許せる友人や幸福感を与えてくれる他者の不在を埋め合わせるために、レオンは鉢植えを親密な他者として扱い、同時に自身の分身のようにも感じている。すなわち、鉢植え植物に触れ丁寧に手入れすることには、現実や孤独からの逃避のみならず、その行為を通して彼自身も癒され、生きる他者によって自らの生を確認するという逃避的側面と、他者とのコミュニケーションへの渴望、命の再認識という複層的な含意があると考えられるだろう。

1.4 根が意味するもの

レオンはまた鉢植えに対して「根がない」という点に共感しているようだ。 “And it’s like me, you see, no roots. ” と言いながら、レオンは植木鉢を左手で持ち上げ、鉢植えと鉢が置かれていた場所の間に生まれた空間に右手を入れると鉢底が地面から離れていることを強調するように右手を左右に動かし、少し微笑むのである。

10 ベッソン (1996, pp.14-15)

11 ラドウェイ (1991, p.90) は、ハーレクインロマンスを習慣的に読む女性達が読書行為を表す際に使用する「逃避」という言葉には2つのレベルがある、と指摘している。ひとつは物語に没頭することが現実を否定する行動となっているレベル、もうひとつは、物語を通して現実の世界とは異なる世界を経験しているレベルである。植物の世話という行為を、水やりなど実質的必要に迫られた要素だけでなく、精神的レベルで捉える際、ラドウェイの分析方法が応用できよう。

12 子供がおもちゃで遊ぶ時、大人が大切なものを扱う時、友達のように接したり名前をつけ話しかけたりすることがある。これはレイコフとジョンソン (1986, p.197) によれば、人が普段、考えたり行動したりする際に基づいている概念体系が、根本的にメタファーによって成立し、その概念体系の中に「道具は友達」というメタファーが存在するためである。

ここで注目したいことは、根という言葉を示す単語が単数形 root ではなく複数形 roots で使用されていることである。植物の根という意味で root という語が用いられる際にもしばしば複数形 roots になるが、日本語表記でルーツと書かれる複数形 roots には、文化的・感情的結びつき、所属感、心のふるさと¹³ という意味がある。映画『レオン』における鉢植えは、レオンのセリフから「根が無い生き物」として描かれ、意味される「根」は、植木鉢の中にある植物の根そのものではなく自分にとっての拠り所としての根、ルーツであることが判明する。

この意味での「roots」という言葉は、レオンとマチルダが最後の会話を交わすシーンでも使われている。物語のクライマックス、スタンスフィールド達がレオンとマチルダが住む部屋を激しく襲撃する中、レオンは窓際に置かれた鉢植えを取るため必死に部屋の中を移動する。鉢植えを手にとるとキッチンへ向かい、レオンは自分のコートで鉢植えを包み、力づくで周囲を壊し大きくした換気口の中へ落とし、続いてマチルダをそこから逃がそうとする。一人では行きたくないと悲願するマチルダに、レオンは言う。“You’ve given me a taste for life. I want to be happy, sleep in a bed, have roots. You’ll never be alone again, Mathilda.”（君は人生の喜びを教えてくれた。私は幸せになりたい、ベッドで寝て、根を持ちたい。君がまたひとりぼっちになることは決してない。）

レオンが擬人化し彼の目にいつも幸せそうに映っていた鉢植えは、レオンが望む彼自身の姿だったのだろう。レオンの分身である鉢植えはレオンがいつも着ていた分厚いコートに彼自身によって包まれ、根を下ろす場所を求めてマチルダと共に外の世界へと脱出する。鉢植えを抱え足早に街を歩くマチルダ。その数分後レオンはスタンスフィールドを道連れに自爆死する。

マチルダに託された鉢植えは、マチルダと共に彼女の寄宿学校へ向かい、マチルダによって植物は植木鉢から出され寄宿学校構内の地面に植えられる。そしてマチルダは言う。“I think we’ll be OK here, Leon.”（私たちは、ここで大丈夫だと思う、レオン）物語はここで終わる。



1.5 映画『レオン』における鉢植えが象徴するもの

映画『レオン』において鉢植えが象徴していることは何なのか。まず、鉢植えはレオンにとってレオン自身である、という解釈がある。レオンは「根がない＝拠り所がない」という類似状況を要因にあげ、“And it’s like me, you see, no roots.”（自分みたい、根がない）と、鉢植えと自分自身を同化させる。他者によって癒されることが無いレオンは、自身の分身である鉢植えを世話することで、自分自身を癒していたのである。レオンと鉢植えが共に映し出される最後の場面で、鉢割れを防ぐ上ではより機能的と考えられるクッションや毛布ではなく、いつも自分が着ていた分厚いコートで鉢植えを包み換気口に落とすという行為も、鉢植えがレオンにとってレオン自身であるという解釈を補強している、と考えられるだろう。

2つめの解釈は、鉢植えはレオンにとって最も近くで生きる他者である、というものである。鉢植えはレオンにとって親友であり、擬人化された性格には、“Always happy.”（いつも幸せそう）という、彼自身の「幸せになりたい」という願望が投影されていた。そして、この生きる他者の世話には、手で触れる、という過剰な行為が含まれていた。このスキンシップを含む鉢植えの世話をすることで、レオンは欠落した他者とのコミ

13 ジーニアス英和大辞典（2001）

コミュニケーションを埋め合せ、孤独から逃避していた、と考えられる。

更に、生きる他者としての鉢植えとレオンの関係を、二者間にある距離という観点から考察すると、一人暮らしをしている期間レオンのプライベートな空間で密接距離¹⁴まで入ってくる生きる他者は鉢植えだけだったが、少女マチルダを受け入れたことによって、鉢植えとマチルダが共に彼の密接距離に存在するようになっていった。マチルダという密接距離にいる他者が増えても、レオンと鉢植えのコミュニケーションが減る、といった様子は全く見られないことから、鉢植えは物語全編を通して、レオンにとって最も近くで生きる他者として描かれている、と解釈するべきだろう。

3つめの解釈は、鉢植えはマチルダにとってレオンである、という解釈である。マチルダが鉢植えとレオンを同化させていると思われる場面のひとつに、物語の中盤、マチルダが鉢植えを窓の外に出し植物を眺めて微笑むというシーンがある。

ここで特に注目したいのは「見上げる」という行為だ。マチルダは鉢植えを両手で持って窓の外に置いた後、両手を窓際につけ頭の位置を低くし、植物を下から見上げる。そして視線を2回下から上に動かし何かを確認するように植物を指差すと、微笑みを浮かべ重ねた手の上にあごを乗せ、窓の外に広がる外界の世界へと視線を移す。

この「見上げる」という行為は、マチルダがレオンを見る際、常に行われている動作である。並んで立った時に50センチ以上はあると思われる2人の身長差は、廊下の床に直に腰掛けるマチルダの横をレオンが通りかかる、という二人の出会いの場面でも必要以上に強調されている。また、物語の後半、マチルダを救いに敵地に駆けつけたレオンが、彼女を無事に助け出し抱きしめるシーンでも、マチルダの足がかなり宙に浮いている様がアップになる、という演出で強調されている。

マチルダにとってレオンは、常に見上げる存在なのである。鉢植えを単に窓の外に出すだけではなく、自らの視線をわざわざ低い位置にしてから植木鉢に入った植物を「見上げる」。そこでマチルダが「見上げて」いる対象は、レオンが大切にしている鉢植え植物であると同時に、レオンそのものなのだ。“I think we'll be OK here, Leon.”（私たちは、ここで大丈夫だと思う、レオン）というラストシーンでのセリフは、鉢植え植物がマチルダにとってレオンである、という解釈を明示している、と言えるだろう。

ここまで述べて来た映画『レオン』において鉢植えが象徴していることをまとめると、

- 1) レオンにとってのレオン自身
- 2) レオンにとって最も近くで生きる他者
- 3) マチルダにとってのレオン

となる。

しかし、映画『レオン』において、鉢植えが象徴していることは、実は、この3つだけではない。鉢植えは物語の中で、4つめとしてレオンとマチルダを、更に5つめとしてレオンとマチルダ二人の関係を、そして最後に、二人の儚さを、象徴しているのだ。

1.6 純愛と同居する未熟さ

鉢植えがレオンとマチルダを象徴している、という4つめの解釈の背景には、レオンのキャラクター設定と、ベッソンが映画『レオン』を通して描こうとした「純愛」の世界観がある。

14 ホール(1970, pp.165-176)によれば、対人関係と距離の相関関係には密接距離、個体距離、社会距離、公衆距離の4つがあり、親密な者同士が相手のぬくもりや息づかいが感じられる最も近い距離を密接距離とした。北米における密接距離の実測値は0～0.46m。

ベッソンはレオンのキャラクター設定について「レオンは12歳の子供の精神と感情を持った40代の男」と述べ、「レオンとマチルダは二人の子供だからこそ、純愛を描くことが出来る」と主張している¹⁵。ここで注目したいのは、この「子供」と「純愛」という言葉が意味することである。概して子供は、成熟した大人に対して未熟な存在とされ、社会化されていないため自己中心的で残酷と考えられる。そして純愛は、社会的な体裁、経済的な損得勘定抜きで、無鉄砲に互いへの愛を貫くこと、と言い換えることが出来るだろう。

子供と純愛が持つこれらの含意を映画『レオン』に当てはめてみると、レオンとマチルダの二人は未熟だったからこそ、無茶なことを無邪気に企て、生と死の狭間を無鉄砲かつ残酷に一気に駆け抜けていった、という流れが浮かび上がる。これは正に映画『レオン』が持つ魅力の1つであることから、レオンとマチルダが「未熟」であることは、儚く美しい純愛物語を描き出す上で不可欠な要素、と考えられるだろう。

そして、この「未熟さ」はまた、鉢植えによっても象徴されている。「根がない」鉢植えは、大地に根ざす植物よりも未熟なものとして扱われ、その未熟さからの脱却は、植物が植木鉢から出され地面へ植え替えられる、という映画のラストシーンで暗示されている。

鉢植えが未熟さを象徴しているなら、未熟であるレオンとマチルダが鉢植えによって象徴される、という4つめの解釈を行うことが可能になる。従って、以上の分析から明らかになるレオン、マチルダ、鉢植えの構図は以下である。

レオン＋マチルダ＝子供＝未熟なもの＝鉢植え

従って

レオン＋マチルダ＝鉢植え

1.7 マチルダとレオンと植木鉢

ここに至るまで「鉢植え」を、植物と植木鉢が一体になったものとして扱い、映画『レオン』において鉢植えが象徴することを4つめの解釈でみてきた。この辺りでそろそろ、鉢植えを「植物」と「植木鉢」に分解して考えたいと思う。

鉢植えが象徴する5つめのこと、それは「植物＝レオン」「植木鉢＝マチルダ」という解釈である。マチルダを受け入れ共同生活を始めたレオンは、マチルダという植木鉢に入り生きることを決めた、と考えることが出来る。そして、植木鉢には、種を芽吹かせ育てる「生」の場という役割と、大地から隔離された植物が命を全うし枯れる「死」の場という役割があることを忘れてはならない。「マチルダ＝鉢植え」と解釈した場合、この「生」と「死」を運ぶ容器としての植木鉢が内包する二面性と、マチルダがレオンにもたらしたものが激しく重なり合う。そこで、マチルダがレオンにもたらしたものを、物語の流れを追いながら「生」と「死」へ向かう変化という異なる2つのレベルで考察したい。

まずマチルダがもたらした「生」への変化を取り上げよう。前述した通り、孤独なレオンは、幸せそうに見える鉢植えに触れることで、自分自身を癒し、孤独感を埋め合わせていた。しかし、マチルダを受け入れたことで、レオンが鉢植えに投影させていた願望は、実生活において幸せになりたい、という自覚へと変わった。これは、“You’ve given me a taste for life. I want to be happy, sleep in a bed, have roots.” というセリフからも明らかだ。また英語での読み書きが出来なかったレオンはマチルダによって知育され、広い社会とのコミュニケーションツールを得た。マチルダとの生活は、レオンに孤独からの解放と、地に足をつけ他者と人生を育んでいく喜びを教えたのである。このレベルで見ると、マチルダはレオンを育み、レオンの人生に光を照らした存在にみえる。

その一方、マチルダはレオンに「死」をもたらす存在でもあった。レオンは、マチルダを受け入れ、彼女の

15 ベッソン (1996, P.44)

復讐計画を実現させるための手助けをしたせいで、スタンスフィールドとの争いに巻き込まれ、彼自身の命を縮めた。興味深いことに、レオンが大切にしていた、彼の分身でもある鉢植え植物も同様に、命を縮めたと思われる¹⁶。このレベルで見ると、マチルダこそが、レオンを死に近づけた人物なのだ。

植木鉢が、植物を包み込み「生」と「死」を運ぶ容器として二面性を内包するように、マチルダもまた、レオンを包み込み、彼の「生」と「死」に関与する二面性を持つ。ここが、「植木鉢＝マチルダ」「植物＝レオン」という解釈が成立する所以である。

また、ここで述べたような植木鉢と植物の関係から必然的に導き出される「鉢植え」の象徴的含意、それが「儚さ」である。「根がない」植物は、「生」と「死」を内包する植木鉢の中に永遠に留まることは出来ない。映画の中で、鉢植えはレオンとマチルダという未熟な男と女のプラトニックな純愛に、必ず終焉が訪れるという「儚さ」をも象徴しているのである。

以上に述べた映画『レオン』における象徴としての鉢植えの意義をまとめると、以下の図のようになるだろう。

鉢植え＝レオンにとっての自分

＝レオンにとっての他者

＝マチルダにとってのレオン

＝未熟なものとしてのレオンとマチルダ

＝儚さ（植木鉢＝マチルダ、植物＝レオン）

2. 映画『レオン』と古代祭式「アドニスの園」

2.1 「アドニスの園」とは

映画『レオン』と同様に未熟な男と女と「根がない」植物が入り交じり、「生」と「死」を内包する鉢と共に水中になげこまれるという「儚い」風習が、古代ギリシャ神話に起源を持つ祭に存在する。アドニア祭における祭式「アドニスの園」である。ギリシャ神話に登場する美少年アドニスに讃えるアドニス崇拜は、シリアのビュブロスから始まりキュプロスをへて小アジア（現在のアナトリア半島）、ギリシャ、エジプト、ローマ帝国まで広く伝わり、アドニア祭という女性だけの祭礼が各地で行われた¹⁷という。その時期は明確に記されていないが、祭式の様子を描いたといわれる陶器が、紀元前5世紀末から4世紀始めに作られているので、祭式はそれ以前に行われていたと思われる。

女性たちはアドニスの「園」として土をみたした壺や鉢の中に大麦、小麦、レタス、ウイキョウ（フェネル）を植え8日間に渡って世話する。その際、発芽を早めるために水の代わりに湯を注ぐという栽培方法も行われたらしい¹⁸。種は暑さのためすぐに芽を出す、根がないため瞬く間に枯れてしまう。8日目が終わると女性たちは植物をアドニスの像と共に海や泉まで持っていき壺や鉢ごと水中に投げ込んだ。イギリスの古典学者ジェーン・エレン・ハリソンの説によれば「アドニスの園」は東の間の美しさと素早い衰えの象徴であった¹⁹。

祭式「アドニスの園」で崇拜されるアドニスの伝説とは、次のような物語である。キュプロス王キニュラスの娘ミュラは、アフロディテにそそのかされ自分の父を愛してしまう。ミュラは乳母の手を借り、娘と気付か

16 レオンが所有している鉢植え植物はサトイモ科アグラオネマ属のニティドゥーム・カーティシーと呼ばれる多年草植物である。直射日光を嫌い日光に当たり続けると葉が黄色くなり枯れてしまう性質を持つ。そのためマチルダによって植木鉢から出され直射日光が当たる野外に植え替えられてしまったこの植物はレオン同様、短命に終わってしまう可能性が高いと考えられる。

17 ドゥティエンヌ（1983, p. 313）

18 ドゥティエンヌ（1983, p. 313）

19 ハリソン（1979, p. 201）

れないようにしながら、自分の父と不倫関係を結ぶ。真相を知った父親は怒り、ミュラは父の復讐から逃れるため、神々に慈悲を乞い没薬（ミルラ）の木に転身した。猪がこの木にぶつかると中からアドニス生まれ、美しいアドニスに恋をしたアフロディテは彼を引き取り、冥界の女王ペルセフォネに預けた。しかしペルセフォネも美しいアドニスに恋をしてしまい、後にアドニスをアフロディテに返すことを渋る。裁きはゼウスに委ねられ、結果、アドニスは一年の三分の一をアフロディテと、もう三分の一をペルセフォネと、残りの三分の一は、好きなように暮らすことを許された。アドニスは一年の三分の二をアフロディテと過ごすことにしたため、ペルセフォネは不満を募らせ、アフロディテの恋人、軍神アレスに告げ口をする。嫉妬に狂ったアレスは猪に姿を変え、狩りをしていたアドニスを襲い突き殺した。アドニスの血からはアネモネの花が咲き、アドニスの魂は冥府に下った。しかしアフロディテは、アドニスが一年のうち半分の期間、地上に蘇ってこられるように取り計らった。

このような伝説から、アドニスは実りの季節が近づくともく散ってゆく花々の守護霊とみなされ、また、Adon とはセム語で「主」であることから、植物の芽生え繁茂と冬季の死を象徴する農業神を意味するようになった²⁰。

「アドニスの園」と名付けられた紀元前5世紀末から4世紀始め頃に作られた、と考えられている陶器の香油壺（レキュトス）²¹に、この祭式の様子が描かれている。



© Badisches Landesmuseum, Karlsruhe

香油壺の中央で女性とエロスが手にしている「鉢植えのようなもの」が「アドニスの園」である。アンフォラと呼ばれる、取手が2つある壺の割れた上部を逆さまにして植木鉢として使っているようだ。地面に置かれた1鉢も、2人が手にしている鉢植えとよく似ている。鉢植え状態のため持ち運び可能なアドニスの園は、香油壺に描かれているように、夏の盛りに屋根の上に運ばれ、灼熱の太陽にさらされた。そして、その結果、植物は命を縮めた。

映画『レオン』で鉢植えを抱えて街の中を歩くマチルダの姿は、アドニスの園を運ぶ女たちの姿と重なる。そしてマチルダと関わったことにより命を縮めたレオンの「死」へと向かう運命もまた、夏の盛り女たちによって屋根の上に運ばれ、灼熱の太陽にさらされ命を縮めた「アドニスの園」の植物の運命と重なる。

映画『レオン』における「太陽」といえば、その存在は、マチルダだろう。彼女はレオンに人間らしく生きる喜びを伝え、彼の人生に光をあてた。読み書きが出来ないレオンを教育し、知的成長の手助けをした。だが同時に、彼を死に近づけた張本人でもある。偶然なのか意図的なのか、よく見るとマチルダが映画の中で常に首に巻いている黒いチョーカーの中央には、顔のある太陽のチャームがついている。

20 中村（1986, pp.25-26）

21 'Adonis Garden'. Classical Art Research Centre University of Oxford Detail from Athenian red-figure lekythos, about 425-375 BC. Karlsruhe, Badisches Landesmuseum B39. 2012 年 11 月 28 日 <http://www.beazley.ox.ac.uk/dictionary/Dict/ASP/dictionarybody.asp?name=Adonis> より情報取得。

2.2 古代祭式「アドニスの園」における鉢植え

「アドニスの園」から見えてくる鉢植えという存在は何なのか。フランスの比較人類学者マルセル・ドゥティエンヌは、アドニア祭で行われる「アドニスの園」における園芸栽培の技術的方法は、正しい農耕の規則を踏みにじるもの、と指摘している。その理由に、アドニスの植物は苗代や農園で生長するのではなく、粘土製の器、欠けた陶器など土を盛った容器の中で発芽すること、「アドニスの園」の土が、真の大地の卑小化されたイメージを持つこと、ギリシャで農耕は長い時間をかけ行われる、男性による真面目な労働であるのに対し、この小さな容器での植物栽培は、遊びや気晴らしをする短い祭りの期間に限り女性によって行われていることを上げている²²。アドニスの園を表す上で使われている「鉢植え」「遊び・気晴らし」「女性」というキーワードは「大地」「真面目」「男性」というキーワードと対比され、アドニスの園の未熟さを浮き彫りにする。ギリシャには「おまえはアドニスの園より不毛だ」という、良質なものを生み出せないもの、成熟しないもの、表面的なものに用いられる諺もあるという²³。

「アドニスの園」に対する解釈は一般に、アドニスを植物の死と再生を象徴する植物神の典型と見て、「アドニスの園」が、美少年アドニスの短い生涯を植物の成長と死になぞらえて再現すること²⁴、と読みとるもの、アドニア祭が夏の盛りに行われ、「園」が水中に投げ込まれたという事実から、少なくともある程度は雨乞いの意味があったのかもしれない²⁵というもの、ドゥティエンヌが提示する、実を結ばず、成熟もせず、根もない、鉢の中で行われる本物の植物栽培に対する否定と見るもの²⁶などがある。どの解釈においても、鉢は種の発芽による「生」が宿り、植物が枯れるという「死」を迎える場所という意味合いは自明であり、ドゥティエンヌの言う不毛な庭であったとしても、「アドニスの園」は8日間という短い期間にせよ「生」と「死」を運ぶ容器としての植木鉢が内包する二面性を具体的に描き出している事例と言えるだろう。

3. まとめ

本論では、まず映画『レオン』を題材に、主要登場人物レオンとマチルダ、そして鉢植えの関係を考察した。その結果、象徴としての鉢植えが持つ6つの含意が明らかになった。

第一に、鉢植えはレオンにとってレオン自身を象徴している、という解釈である。彼は「根がない＝拠り所がない」という類似状況を要因にあげ、鉢植えに自分自身を同化させていた。第二に鉢植えは、レオンにとって最も近くで生きる他者の象徴である、という解釈、第三に鉢植えは、マチルダにとってレオンを象徴している、という解釈である。第四に鉢植えは、レオンとマチルダを象徴し、二人の「未熟さ」は、大地に根ざす植物よりも未熟な「根がない」鉢植えによっても象徴されていた。

第五に鉢植えは、植物と植木鉢に分解して考えることで、植物がレオンを、植木鉢がマチルダを象徴している、という解釈ができた。レオンは、マチルダを自分の生活に受け入れた時点で、マチルダという植木鉢に入り生きることを決めた「植物」と見なすことが出来た。そしてマチルダは、レオンを育み彼の人生に光を照らしつつも、スタンスフィールドとの戦いに巻き込み、レオンを死に近づけた張本人であることから「生」と「死」の二面性を内包する存在、といえた。これは、種を育てる「生」の場であり、植物が命を全うし枯れる「死」の場でもある、植木鉢が内包する二面性と重なり合う。

第六に、鉢植えが象徴することは「儚さ」だった。「根がない」植物が、「生」と「死」を内包する植木鉢の

22 ドゥティエンヌ (1983, pp.219-222)

23 ドゥティエンヌ (1983, p.215)

24 フレイザー (2009, pp. 155-168) は、アドニスの儀式は模倣呪術で、穀物の生長を模倣すれば豊作を期待できるのではないかと、という人間の願望の現れと指摘している。その為、同質の儀式は世界各地で行われていることを提示している。

25 ハリソン (1979, p. 202)

26 ドゥティエンヌ (1983, p. 216)

中で永遠に生き続けることが不可能であるのと同様に、レオンとマチルダという未熟な男と女のプラトニックな純愛には、必ず終焉が訪れるという「儚さ」を、鉢植えは象徴していたのである。

興味深いことに、ギリシャ神話に登場する美少年アドニスを読める祭り、アドニア祭で行われた「アドニスの園」と呼ばれる植木鉢を使用した祭式においても、この映画『レオン』における「生」と「死」を運ぶ容器としての植木鉢が内包する二面性が、同様に見て取れることがわかった。

映画『レオン』で鉢植えを抱えて街の中を歩くマチルダの姿は、秘儀「アドニスの園」における女たちの様子と重なる。そしてマチルダと関わったことにより命を縮めたレオンの「死」へと向かう運命もまた、夏の盛り女たちによって屋根の上に運ばれ、太陽にさらされ命を縮めた「アドニスの園」の植物の運命と重なる。レオンが植物なら太陽はマチルダで、レオンはマチルダという太陽に照らされ成長し、儚く散った。偶然か、意図的か、マチルダが常に首に巻いている黒いチョーカーには、顔の付いた太陽のチャームがぶら下がっていた。これら事実、鉢植えに注目し考察した結果、明らかになった映画『レオン』と「アドニスの園」が共有する要素である。

「アドニスの園」そのものの解釈としては、穀物の生長を模倣すれば豊作を期待できるのではないかと、という人間の願望の現れ、とするフレイザーによる指摘もあった。しかし、本稿は、ドゥティエンヌの分析と親和性を持っていた。ドゥティエンヌは「アドニスの園」から見えてくる鉢植えの解釈には、アドニスの園が持つ「鉢植え」「遊び・気晴らし」「女性」というキーワードが、労働としての農耕が連想させる「大地」「真面目」「男性」というキーワードと対比され、正しい農耕の規則を踏みにじるもの、とした。これは、映画『レオン』において、鉢植えが未熟なものとして描かれ、儚さの象徴となっている、という本論の解釈と同質の結論を有するものだったからである。

フランス・アメリカ合作作品として製作された現代の人気映画『レオン』と、古代ギリシャの秘儀「アドニスの園」を、象徴としての鉢植えという視点から再考察することで明らかになった「儚さを運ぶ植木鉢」という解釈。それは、植木鉢が内包する種を芽吹かせ育てる「生」のための空間という陽としての象徴のみならず、植物がその生を全うし枯れ果ててゆく「死」の現場という陰としての象徴をも浮き彫りにし、鉢植えの二面性を描き出した。

本稿は、植木鉢を単なる容器ではなく、植物の「生」と「死」を担い運ぶ空間である、と認識することで、人と鉢植え植物の新しいコミュニケーション分析が可能になることを提示した。引き続き鉢植えに注目し研究を進め、成果物を世に送り出してゆくことは、私たちの身近に存在する鉢植えに対する「まなざし」への変容や、人と鉢植え植物の間で交わされる新たなコミュニケーションスタイルの創造に繋がっていくことだろう。

<引用および参考文献>

- ベッソン, L. (1996). 『レオン: リュック・ベッソンの世界』 (山崎敏・訳). ソニーマガジンズ.
- ドゥティエンヌ, M. (1983). 『アドニスの園: ギリシアの香料神話』 (小薊米けん・鶴沢武保・訳). せりか書房. [原著 Detienne, M. (1972). *Les Jardins d'Adonis*. Paris: Gallimard].
- フレイザー, J.G. (2009) 『金枝篇: 呪術と宗教の研究 5 アドニス、アッティス、オリシス』 (石塚正英・監修 神成利男・訳). 国書刊行会. [原書 Frazer, J.G. (1936). *The Golden Bough: A study in magic and religion 3rd edition*. Macmillan and Co.,].
- ジアネッティ, L. (2004). 『映画技法のリテラシー 2: 物語とクリティック』 (堤和子・増田珠子・堤龍一郎・訳). フィルムアート社. [原著 Giannetti, L. (2002). *Understanding movies 9th edition*. New Jersey: Pearson Education].
- ホール, H. (1970). 『かくれた次元』 (日高敏隆・佐藤信行・訳). みすず書房. [原書 Hall, E.T. (1966). *The Hidden Dimension*. New York: Doubleday&company Inc].

- ハリソン, J. E. (1979). 「古代芸術と祭式」(山崎正和・編 喜志哲雄・訳)『世界の名著 続 15 近代の芸術論』. 中央公論社. [原著 Harrison, J. E. (1913). *Ancient Art and Ritual*.].
- 平野恵 (2006). 『十九世紀日本の園芸文化: 江戸と東京、植木屋の周辺』. 思文閣出版.
- Horwood, C. (2007). *Potted History: The Story of Plants in the Home*. London: Frances Lincoln Ltd.
- 川島昭夫 (1999). 『植物と市民の文化』. 山川出版社.
- 小西友七・南出康世 (編集主幹) (2001). 『ジーニアス英和大辞典』. 大修館.
- レイコフ, G. ・ジョンソン, M. (1986). 『レトリックと人生』(渡部昇一・楠瀬淳三・下谷和幸・訳). 大修館書店. [原著: Lakoff, G., & Johnson, M. (1980). *Metaphors we live by*. Chicago: University of Chicago Press].
- マルヴィ, L. (1922). 「視覚的快楽と物語映画」(斉藤綾子・訳)『imago』第3巻, 第12号 (1992年11月号), 42頁-44頁. 青土社. [原著: Mulvey, L. (1985). Visual pleasure and narrative cinema, in *Movies and Methods*, vol. 2 (ed.) Bill Nichols, pp. 14-26. Berkeley: University of California Press].
- 丸島秀夫 (1982). 『日本盆栽石史考』. 講談社.
- 中村栄子 (1986). 『欧米文芸登場人物辞典』. 大修館.
- Radway, A.J. (1991). *Reading the Romance: Women, Patriarchy, and Popular Literature*. North Carolina: University of North Carolina .
- 素木洋一 (1987). 『セラミックを考える』. 東洋経済新報社.
- 白幡洋三郎 (1994). 『プラントハンター: ヨーロッパの植物熱と日本』. 講談社.